

宣教師のいない西南学院

小林 洋一



全国に約100弱はあると思われるキリスト教系の学校、いわゆるミッション・スクールの多くは宣教師によって始められたものである。プロテスタントでは、近くの福岡女学院（福岡市）、西南女学院（北九州市）、活水女学院（長崎市）、そしてわが西南学院もまたしかりである。言わずもがなながら、西南学院は米国南部バプテスト派の宣教師によって創立されたミッション・スクールである。それぞれの学校は、宣教師の篤き信仰、教育への独自の見識と情熱が原動力となって建てられたものである。

企画広報課が作成した宣教師名簿によると、戦前、戦後、2004年までに、西南学院に奉職した米国南部バプテストの教育宣教師の数は75名に及ぶ。この中には、いわゆるジャーニマンと言われる2年任期の宣教師見習いの人数は含まれないので、これらの人々を加えると人数はさらに増える。奉職宣教師の専門は、大学の場合、神学専門が一番多く、次が英文、英語等の言語関係、少数ではあるが社会科学、自然科学、芸術と続き、中高の場合は英語、幼稚園の場合は教育となっている。それぞれが建学の精神を担い西南学院の教育・研究の進展のために計り知れない働きをされたことは言うまでもない。特に、西南学院の戦後の荒廃からの立ち直りには、人的にも、財的にも米国南部バプテスト外国伝道局（現国際宣教局）を通しての日本バプテスト宣教団の貢献に大なるものがあった。

しかし、宣教師と西南学院ということでは、2004年以来宣教師のいない時代を迎えている。この場合の、宣教師がいない、とは、米国南部バプテスト連盟国際宣教局派遣の宣教師がいなくなった、という意味である。このような事態は、戦時中という特殊な事情を除けば、90

年に及ぶ西南学院史の中で初めてのことであり、一つの歴史的イベントと言えよう。

今回は、戦争ではなく、宣教師の派遣母体である米国南部バプテスト連盟内の神学的イデオロギー闘争による神学的変質が大きく関係している。米国南部バプテスト連盟は、それまでの中道的神学のバランスを崩して根本主義化し、例えば、信条主義を取らないバプテストのあり方に反して、信条で宣教師を束縛する、あるいは女性牧師を認めない、というような立場をとるに至った。さらには、短絡的開拓伝道にその宣教使命を見出し、既成教会、学校、病院、施設等での宣教師の働きに意義と使命を認めることを止めてしまった。

宣教師がいなくなってしまうことではあるが、ポスト・コロナリズムの時代、宣教師の時代は終わったのであろうか。キリスト教が欧米社会で体制派となって以来、そのような国々から派遣される宣教師には、どこか植民地主義あるいは帝国主義の陰がつきまとってきた。確かに、今は、宣教師から教えを仰ぐ、宣教師のリーダーシップを求める時代でないかも知れない。しかし、イエス・キリストにある和解と赦しを証する宣教師の存在は時代を超えて評価され続けて行くものと考えられる。

この度、西南学院では、これまでの宣教師の働きを顕彰して、記念碑を建てることになった。このことにより、西南学院は、宣教師の時代に一つの区切りをつけることになる。しかし、これが、宣教師との関係を断つことの象徴にならないことを願う。西南学院に、またぜひ宣教師を迎えたいものだと思う。「人は存在そのものが祝福であり」、人は聖化を目指して生きる存在であることを気づかせてくれる宣教師の存在を、いつの時代でも、私たちは必要としている。